慶應義塾大学　グローバルCOEプログラム　論理と感性の先端的教育研究拠点

Newsletter

2010 June No, 12

CARLS

Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility

論理と感性のあいだ
Between Logic and Sensibility

野家啓一　東北大学理事・文学研究科教授
Keiichi Noe　Executive Vice-President, Professor, Tohoku University

「論理と感性」という魅力的なテーマから私が直ちに連想したのは、パスカルが『パンセ』の冒頭で区別した二種類の心の働き、すなわち「幾何学の精神」と「繊細の精神」との対比である。幾何学の精神とは、明らかな原理から一歩一歩誤りなく証明の道をたどる論理的な推論能力を意味する。他方の繊細の精神とは、現実的な事柄について正しく公平に理解し判断する能力であり、そのためには「推理の運びによってではなく、一遍で一目で見なければならない」(1) と言われる。いわば「直感（直観）」による把握ということであろう。実際、パスカルは繊細な事柄について「このほうの原理はほとんど目に見えない。それらは、見えるというよりはむしろ感じられるものである」(1) と述べている。

この幾何学の精神と繊細の精神の対比は、現代で言えば、理系と文系の頭の働き方の違いということになろう。そしてパスカルによれば「幾何学者が繊細で、繊細な人が幾何学者であるのは珍しい」(1) のである。では、両者を統合することはできないのであろうか。一つの手がかりを与えてくれるのは、幾何学的論証の構造をきわめて明晰に分析したパスカルの遺稿『幾何学的精神について』である。そこで彼は、最も厳密な論証を構成する方法として二つの事柄を挙げている。「一つは、あらかじめその意味を明確に説明しなかった用語は一つも用いないこと、他は、既知の真理によって証明されなかった命題は決して提出しないこと」であり、つまりは「あらゆる用語を定義し、あらゆる命題を証明する」ことにほかならない。だが、この理想は実行できない。当然ながら、すべての用語を定義し、すべての命題を証明しようとすれば、それに先行する用語や命題に遡らざるをえず、無限後退か循環論法に陥ることは必定だからである。

そこでパスカルは、もはや定義しえない「始原的な語」と証明するまでもなく明白な「原理」に到達したところで満足すべきことを提案する。現代的に言えば、無定義用語と無証明命題（公理）で打ち止めにするということであろう。これは 20 世紀数学を領導したヒルベルトの思想（公理主義）を先取りする先駆的議論と言わねばならない。それでは、始原的な語の適切さと原理の正しさは、何によって保証されるのであろうか。パスカルは「自然の光によって」と答える。すなわち「幾何学の提出するいっさいのものは、自然の光によってか、証明によってか、完全に論証される」のである。

この「自然の光」は、通常は人間理性を意味するものとされているが、『パンセ』の中の「われわれが真理を知るのは、推理によるだけでなく、また心情によってである。われわれが第一原理を知るのは、後者によるのである。（中略）原理は直感され、命題は結論される」(282) という断章に照らせば、「直感（直観）」と考えることができる。理性による論証が行き詰るところでは、心情による直感（直観）が働き始めるのである。むろん、心情とは先の「繊細の精神」のことにほかならない。このことについて、三木清は『パスカルにおける人間の研究』において「直観は論理と同じ仕方においてではないけれども確実であることにおいて変りはない」として、「論理の根底には直観がある。直観は論理の初めと終りとに立っている」と述べている。いわば論理と感性とはメビウスの帯のように、ねじれながらも深く結びついているのである。

パスカルは人間を無限と虚無との「中間」にある存在と規定した。人間はまた論理と感性の「中間」にある存在でもあろう。人はパンのみにて生きることができないように、論理のみで生きることはできない。「人は愛の諸原因を秩序立てて説明することによって、愛されるべきであるということを証明しはしない。そうしたら滑稽であろう」(283) と言われる通りである。グローバル COE プログラム「論理と感性の先端的教育研究拠点」が、論理と感性の「あいだ」にある人間のあり方を解明するとともに、幾何学の精神と繊細の精神を併せもった若手研究者を育成されることを刮目して期待したい。

（付記：パスカルからの引用はすべて人文書院版『パスカル全集』全三巻による。引用文の後の数字はブランシュヴィック版『パンセ』の断章番号を示す。）

(See next page for English summary)

Contents

論理と感性のあいだ
Between Logic and Sensibility　1

国際シンポジウム
Evolution, Development and Education of Logic and Sensibility　2

平成 21 年度若手研究成果報告会
Annual Meeting for Oral Presentation of Young Researchers　3

Keio-Gachon NRI Joint Symposium
Keio-USF Joint Seminar　4

カントの超越論的観念論についての集中講義 II
Kant's Transcendental Idealism in Focus II
証明論ワークショップ
A Proof Theory Workshop (with Lecture Series by Grigori Mints)　5

他者認識・共生にのぞむ感性：文化研究と臨床実践の交差点
At the Crossroads of Cultural Research and Clinical Practice
フィクションの哲学
The Workshop "The Philosophy of Fiction"　6

2010 年度 MRI 講習会
MRI Safety Lecture
活動報告　7

研究員紹介・事務局だより　8

国際シンポジウム　International Symposium

“Evolution, Development and Education of Logic and Sensibility”

（3月7—8日　三田キャンパス北館ホール）

2010年3月7日から8日にかけて、GCOE国際シンポジウム"Evolution, Development and Education of Logic and Sensibility"が三田キャンパスにて開催されました。

一日目の午前中は、動物行動・比較認知の分野に関する研究発表がありました。Gavin Hunt博士（オークランド大学）は、ニューカレドニアに生息するカラスの一種を対象に、自然状況での道具使用を研究されています。発表では、興味深い映像の紹介とともに、道具の地理的変異や獲得のプロセスに関するデータが示されていました。Hans-Joachim Bischof博士（ビーレフェルト大学）の発表では、鳥の社会関係とその神経生物学的基盤に関するデータが示され、論理と感性への言及がなされていました。

一日目の午後は、乳幼児の脳画像研究に関する研究発表がありました。皆川泰代博士（遺伝と発達班）は、定型発達児の母語獲得における「論理」について、最新の脳画像研究のデータから新たな理論モデルを提唱されました。Joseph McCleery博士（バーミンガム大学）は、自閉症児とそのきょうだいの脳画像研究の最新データを示し、自閉症児の社会的機能について論じられました。北澤茂博士(順天堂大学）は、自閉症児へのエビデンス及び理論に基づいた介入について映像を交えて紹介され、自閉症児の適応的発達支援について考察されました。

二日目は、「教育」を進化的に考察することを目的としたシンポジウムでした。Alex Thornton博士（ケンブリッジ大学）から、共同繁殖するミーアキャットにおける教示行動をもとに、動物における教示行動の進化生物学的基盤とヒトにおける教育との相違点に関する発表がありました。友永雅己博士（京都大学霊長類研究所）は、チンパンジーにおける社会的学習と心の理論に関係する認知能力の研究史を振り返り、チンパンジーには教示行動がないとする知見をもとにしたうえでの今後の研究の方向性を論じられました。John Sweller博士（ニューサウスウェールズ大学）は、生物進化とヒトの認知に関する5原則について紹介し、教育を進化的に考察する試みの基盤理論について考察されました。Sidney Strauss博士(テルアビヴ大学)は、ヒトの教示行動と動物の教示行動の差異性について、「教育」の心理学的定義と進化論的定義に触れつつ論じられました。長谷川眞理子博士(総合研究大学院大学）は、ヒトとチンパンジーの比較をもとに、生活史理論に根差した社会的認知能力の考察をされました。人類史の視点を取り入れた学際的なアプローチが教育を考えるうえで重要であることが明確に示されていました。赤木和重博士（三重大学）からは、ヒトの教示行動の発達について、自閉症児と定型発達児を比較したデータが示され、ヒトにおいて教示行動が成立・発達する条件について考察する発表がありました。玉田圭作氏（慶應義塾大学）は、上記6人の発表内容とは視点を変え、日本が世界に誇るマンガについて発表されました。マンガから「学ぶ」ことができるのか、マンガを「教育」に用いることができるのか等、マンガと教育の関係を科学的に研究していく可能性について論じられました。

各発表者の研究のバックグラウンドは行動生態学から心理学まで幅広いようですが、どの研究者も自らを「教育学者」と名乗ることなく、「教育」についてディスカッションが繰り広げられたことが印象的でした。日ごろ口にされる「教育」と、シンポジウムで語られた「教育」との間にかなりの距離感を私は感じました。教育学者、あるいは教育学を研究する方が、このシンポジウムに参加されていたなら、どのように考えられたか伺ってみたいと思いました。また、「教示」と「教育」、「Teaching」と「Education」の違いといったように、丁寧に言葉の定義をしていくこと、またそのための議論が重ねられることによって、私が感じた距離感も変化していくのだろうかなどと考えました。

今回のシンポジウムは、両日ともに、実に多岐にわたる研究分野の発表が、論理と感性の「進化・発達・教育」というキーワードを元に融合されたシンポジウムでした。このような学際的なシンポジウムは、シニアの研究者だけではなく、若手研究者・院生にとっても刺激的な経験となります。今後のGCOE国際シンポジウムを楽しみにしたいと思います。（藤澤啓子）

Global COE International Symposium “Evolution, Development and Education of Logic and Sensibility” was held on 7-8th March, 2010. There were 15 presentations which covered various research areas; animal behavior, comparative and cognitive psychology, brain imaging, developmental disorders, behavioral ecology, educational psychology and so on. This symposium well united those presentations and promoted active discussion. The interdisciplinary symposium like this would be stimulating and exciting for young researchers and graduate students as well as senior researchers, and provide them with new ideas for their own research.

1ページ目の英訳　**Between Logic and Sensibility**

"Logic and sensibility", the fascinating theme of the Keio GCOE program reminds me of Pascal's famous distinction between the spirit of geometry and the spirit of fineness in his *Pensées*. Through the explication of the nature of mathematical proof, Pascal shows that human activities are made possible by the cooperation of these two spirits. In this sense we humans are situated in a zone which exists between logic and sensibility. I expect that CARLS would achieve great success in the exploration of such a zone by the cultivation of young researchers with both spirits.

newsletter no-12.indd 2　10.6.22 5:09:16 PM

平成 21 年度若手研究成果報告会

Annual Meeting for Oral Presentation of Young Researchers

（2 月 1—2 日三田キャンパス北館大会議室）

平成 21 年度の若手研究成果報告会が、2 月 1・2 日の 2 日間にわたって三田キャンパス北館大会議室にて行われた。この報告会は、本研究拠点の特別研究教員、非常勤研究員らが研究成果を各 20 分間（発表 15 分、質疑応答 5 分）の持ち時間で口頭発表するというものである。初日は主に脳と進化班と遺伝と発達班に所属する若手研究者が 3 つのセッションに分かれて最新の成果を報告した。

第 1 セッションは動物実験による比較認知研究が主要なテーマで、石井拓（以下、敬称略）がコモンマーモセットにおけるショ糖溶液消費量の価格弾力性、山崎由美子がニホンザルの道具使用獲得にともなう行動型の変化、加藤真樹がコモンマーモセット脳における言語関連遺伝子の発現解析、伊澤栄一がカラスにおける優劣関係維持に関わる神経回路の探索に関する成果報告を行った。第 1 セッションの座長は、脳と進化班の伊澤栄一が行った。

第 2 セッションでは、機能的 MRI、近赤外分光法（NIRS）、経頭蓋磁気刺激（TMS）などヒトの脳画像研究が報告された。染谷芳明が仮名表記した文字の理解に関わる脳機能の解析、山本絵里子がバイオロジカルモーション知覚に関わる脳部位の検討、田谷文彦が学習におけるフィードバックの役割、辻井岳雄が論理的思考における下前頭前野の役割に関する成果報告を行った。第 2 セッションの座長は、脳と進化班の辻井岳雄が行った。

第3セッションでは、双子ラボを中心とした遺伝と発達に関する研究発表が行われた。敷島千鶴が一般知能測定のための簡易尺度開発の試み、高橋甲介が刺激間の関係学習の観点からの自閉症児支援、太田真理子が聴覚刺激に対する心臓反応と光トポグラフィ信号・脳波の関係解析、皆川泰代が GCOE 赤ちゃん・ちびっこラボにおける研究、佐治伸郎が第二言語習得における複数語彙の意味関係理解に関する研究発表を行った。第3セッションの座長は、遺伝と発達班の安藤寿康が行った。

2 日目、第 1 セッションでは、脳と進化班、言語と認知班および遺伝と発達班からの発表が行われた。一方井祐子は、セキセイインコの婚外交尾（EPC）をめぐる、第三者関係の理解について報告し、日根恭子は、未来を想像することが顔の再認に及ぼす影響を検討した。島田純理は、自然言語における存在文の真理条件を、「存在量化」のルベーグ積分により分析し、佐々木掌子は、性同一性障害傾向に寄与する遺伝的影響の発達に伴う変化を報告した。

第 2 セッションは、論理・情報班および哲学・文化人類学班からの報告であり、植村玄輝は、フッサールが『純粋論理学のためのプロレゴメナ』（1900 年）で示した論理学概念を再検討し、串田裕彦は、論理体系「ゲーデル文の様相論理(GS)」を導入し、ゲーデル文の論理的諸性質を調査した。石田京子は、マーサ・ヌスバウムの研究を基に、政治的リベラリズムの観点から感情と法の関係を検討し、秋吉亮太は、論理学・数学の哲学に関する問題を、タイプ理論の研究（直観主義）、二階算術の証明論（直観主義ベースの証明論）の観点で論じた。

第3セッションは、引き続き、哲学・文化人類学班の発表が行われ、馬場鉄兵は、哲学者ジョージ・バークリーによる懐疑論の解決を、対象物の認知に関連づけて論じた。鈴木康則は、ジャック・デリダの初期の思想におけるフッサール評価を、後の思想展開と関連づけ、検討した。モハーチ・ゲルゲイは、糖尿病患者会の活動が、社会技術的通約化（technosocial commensuration）を促し、病気のコントロールを可能にしていく様相を、星聖子は、15 世紀の教会堂装飾を例に、美術作品において論理と感性が協働している事例を報告した。

2 日間にわたる若手研究者の成果報告は、本拠点における研究が、実験科学的研究から、思想、歴史的研究に至る広範な分野にわたって行われ、「論理と感性」という観点から、ヒトの諸活動を明らかにする多様な試みが行われていることを示した。（辻井岳雄、星聖子）

The second annual meeting for oral presentation of young researchers was held in the main conference room in North building, Mita campus, Keio University (Date: February 1st-2nd, 2010). The meeting of the first day included three sessions. In the first session, four young scientists presented their recent works about the evolutional aspects of logic and sensibility in animal laboratories. In the second session, four scientists presented their recent works about the neural mechanisms of logic and sensibility in the human brain using fMRI, fNIRS, and rTMS. In the third session, five scientists presented their works about the genetic and developmental aspects of logic and sensibility in laboratories of twins and newborn infants. On the second day, 12 young scientists from a variety of fields such as Brain and Evolution, Genetics and Development, Language and Cognition, Logic and Informatics, and Philosophy and Cultural Anthropology reported their studies. All two days sessions demonstrated that a wide variety of researches to clarify the human activities are under investigation in CARLS in the light of ‘logic’ and ‘sensibility’.

newsletter no-12.indd 3 10.6.22 5:09:20 PM

合同シンポジウム "Keio-Gachon NRI Joint Symposium"

Keio-Gachon NRI Joint Symposium

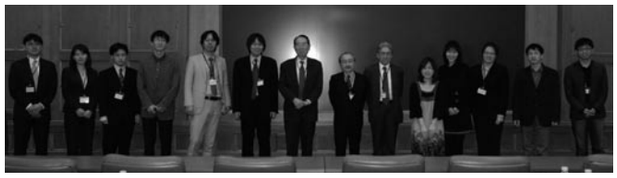
（2月27日　三田キャンパス東館8階）

2010年2月27日、本塾三田キャンパスにてKeio-Gachon Neuroscience Research Institute (NRI) 合同シンポウムが開催された。嘉泉医科大学 (Gachon University of Medicine and Science) は、本拠点のアジアにおける海外連携拠点であり、合同シンポジウムの開催は、昨年3月に続き2度目となった。今回は、同研究所と本拠点から若手研究者4名ずつによる自身の研究についての発表に加え、本拠点の小川誠二訪問教授（東北福祉大学感性福祉研究所・特任教授）とGachon NRI所長のZang-Hee Cho教授から基調講演が行われた。

Gachon NRI側の若手研究者からは、視覚処理の認知神経基盤やその研究方法論、音楽および非音楽聴取に関わる神経基盤の相違、ハングル文字および漢字処理の神経基盤に関する発表が行われた。いずれの研究者もfMRI研究に精通しており、同研究所の研究体制の充実が伺えた。本拠点の若手研究者からは、経済的な意思決定課題遂行時や空間探索課題実施時の脳活動、美的価値判断の神経基盤、感情と身体内部感覚の神経基盤の相違に関する発表が行われた。拠点発足以来の研究成果の蓄積を表すものであった。いずれのトピックも国際的に注目されており、最新の研究成果の共有は連携拠点間の協力体制のもとで研究を進める礎になりうる有意義なものであった。韓国、日本双方の若手研究者にとって、国際的な研究活動を行うためには英語による発表や議論のスキルの習得が重要な課題である。本シンポジウムは、この点に関して研鑽を積める貴重な機会でもあった。

基調講演は、韓国・日本の脳画像研究の第一人者による講演とあって、拠点外からの参加者も数多く見られた。小川特任教授からはfMRI研究の変遷と最新の研究方法論をお話し頂き、参加者は自身の研究への応用方法を模索しながら熱心に耳を傾けていた。Cho教授からは高磁場MRIやPETを備えたGachon NRIの世界最高峰の研究環境や、世界トップレベルの研究拠点設計構想についてお話を頂いた。シンポジウムの閉会にあたっては、今後のさらなる研究協力体制の強化や共同研究の推進についての確認がなされた。（寺澤悠理）

The 2nd Keio-Gachon NRI joint symposium was held at Keio University. Keynote speeches by Prof. Cho and Prof. Ogawa were given and 8 young scientists presented their own researches.



慶應・南フロリダ大学合同セミナー "Psychology and Neuroscience Seminar"

Keio-South Florida Joint Seminar "Psychology and Neuroscience Seminar"

（1月15—16日　南フロリダ大学）

2010年1月15、16日の二日間にわたり、南フロリダ大学にて慶應・南フロリダ大学合同セミナー"Psychology and Neuroscience Seminar"が、清水透南フロリダ大学教授の差配により開催された。南フロリダ大学は、2008年より本拠点と国際提携を結んでおり、今回は第一回目となるセミナーである。

最初に、南フロリダ大学心理学科長のMichael Brannick博士およびCenter of Excellence for Aging and Brain Repair（CABR）所長のPaul Sanberg博士から挨拶があった。初日は、議長を務めるCABRのCesario Borlongan博士の開幕宣言の後、慶應側から参加した辻井、伊澤、田谷の三名が発表を行った。次いで、南フロリダ大学側から、Alcohol and Substance Use Research Institute (ASURI) の所長を務めるMark Goldman博士がアメリカにおける心理学の最新のトピックを概観し、初日のセミナーを終えた。二日目は、清水透博士が議長を務め、南フロリダ大学の若手研究者が相次いで発表を行った。清水研究室のTadd Patton氏が鳩の視覚系を中心に鳥類の脳について、EEGのP300に関する研究で著名なDonchin博士の研究室からSiri-Maria Kamp氏がP300と記憶の関係についてVon Restorff効果を利用した実験について、CABRのYuji Kaneko博士が中枢神経系の回復過程について話をした。

セミナーの合間には、USF内の施設を見学した。清水博士やDonchin博士の研究室を初め、CABRやASURIを見学したが、いずれも研究設備が非常に整っており、南フロリダ大学の研究機関としての底力を感じた。今後、セミナーだけでなく、具体的な共同研究に結びつくことを期待したい。（田谷文彦）

The first Keio-South Florida Joint Seminar was held at University of South Florida on January 15th and 16th. We hope this would be a first step toward a concrete join research.

newsletter no-12.indd 4　10.6.22 5:09:25 PM

カントの超越論的観念論についての集中講義 II
Kant's Transcendental Idealism in Focus Part II

2010 年 3 月 3 日　三田キャンパス東館 4F　セミナー室
5 日　西校舎 525B 教室

2010 年 3 月 3 日および 5 日に、哲学・文化人類学班、倫理・情報班の主催により、Denis Schulting 教授（オランダ、アムステルダム大学）を迎えた連続講演「Kant's Transcendental Idealism in Focus Part II」が三田キャンパスにて開催された。本講演は、2009 年 12 月の Part I（Lucy Allais 教授による連続講演）と対をなすプログラムの一環であり、その目的は、カントの超越論的観念論の意義を、哲学史・哲学的観点から問い直すというものである。Schulting 教授は、第一回の講演会において、カントの超越論的観念論の中心的主張である「物自体」と「現象」の区別の解釈に関する近年の論争を、膨大な関連文献を踏まえつつ批判的な観点から概観した。また、第二回講演では、『純粋理性批判』のなかでもとりわけ難解なことで知られる「カテゴリーの超越論的演繹」について、Schulting 教授の解釈が提出された。両講演とも活発な議論を引き起こす刺激的なものであり、また、カント哲学の検討を通じた論理と感性の問題へのアプローチの可能性をおおいに感じさせるものであった。（植村玄輝）

Under the organization of the Philosophy and Cultural Anthropology Unit and Logic and Informatics Unit, a series lecture of Professor Denis Schulting (University of Amsterdam) on Kant's transcendental idealism was held at Mita campus.

証明論ワークショップ

A Proof Theory Workshop (with Lecture Series by Grigori Mints)

（2010 年 3 月 17-18 日　三田キャンパス北館大会議室）

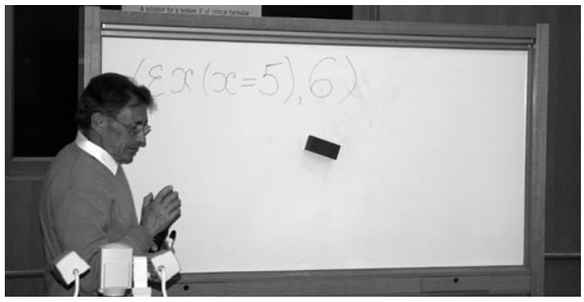
2010 年 3 月 17 日・18 日に Grigori Mints 教授（米国、スタンフォード大学）を招いた証明論ワークショップが行われた。本ワークショップは、慶應義塾大学「論理学とフォーマルオントロジー」オープンリサーチセンターとの共催によって実現したものである。

Mints 教授は数学基礎論（特に証明論）の分野を牽引してきた数学者であり、順序解析、構成主義数学から様相論理、線型論理のようないわゆる非古典論理までありとあらゆる分野で重要な業績を残してきた。特に、Mints 教授は Hilbert 以来の伝統的な証明論的手法である ε 代入法を大きく発展させた先駆者であるが、今回はその ε 代入法に関する最新の成果を二日にわたってレクチャーして頂いた。そのアイディアはモデル論的手法を ε 代入法に応用するというものであり、ε 代入法が非可述的な強い理論へと拡張できることが示された。この手法の特徴は Hilbert 以来の手法に比べると格段に理解がしやすいという点にある。

国内からは国立情報学研究所 (NII) の龍田真教授、千葉大学の新井敏康教授、沖縄科学技術研究基盤整備機構 (OIST) の Gunnar Wilken 博士、神戸大学大学院生江口直日氏を招きそれぞれに最新の研究成果をご報告頂いた。慶應義塾大学からは Mints 教授の指導の下、スタンフォード大学で博士を取られた白旗優准教授、当拠点串田裕彦博士、そして本稿執筆者秋吉亮太が研究報告を行った。

今回のワークショップの目的は、国内外から一流研究者を招き、活発な情報交換を行うことであり十分に達成されたと思う。また、Mints 教授は本稿執筆者の共同研究者および博士論文の査読者の一人でもあり、順序数を用いないカット除去法の展開、及び Gentzen 以来のカット除去の手法を ε 代入法に応用するという Mints 教授のアイディアについて議論してきた。今回の滞在中にこれらに関する共同研究を、さらに進めることができた。（秋吉亮太）

The workshop of proof theory was held at Mita Campus in which Professor Grigori Mints (Stanford University) gave two lectures on epsilon-substitution. We had active and fruitful discussions.



newsletter no-12.indd 5　10.6.22 5:09:27 PM

研究ワークショップ　他者認識・共生にのぞむ感性：文化研究と臨床実践の交差点

At the Crossroads of Cultural Research and Clinical Practice

（3月22—23日　三田キャンパス東館4階セミナー室）

2010年3月22、23日にわたって、文化人類学グループリーダーの宮坂敬造教授の企画で、「他者認識・共生にのぞむ感性：文化研究と臨床実践の交差点」の研究ワークショップが開かれた。精神医学、人類学、社会学という異なる分野の専門家が集まり、自己と他者の間を媒介する多文化的臨床感性というテーマを中心に、6つの発表ならびに討論が行われた。名古屋市立大学の野村直樹先生が、「時間病を治す時間を求めて・・・E系列の時間の可能性・・・」を題する講演で、近代時間というものが、コミュニケーションの視点から唯一の時間ではないことを明らかにした。ついで、University of British Columbiaの石山一舟先生には、「多文化社会における心理援助と臨床訓練・多文化的臨床感性のあり方—カナダからの提言」について講演いただいた。また、慶應義塾大学の大沼麻実氏はアルコール依存症、皆吉淳平氏は脳死をめぐるバイオエシックス、University of Michiganの照山絢子氏は日本の発達障害者団体、日本ブリーフセラピー協会の生田倫子氏は多世代同居について報告した。各発表に対して、上智大学の堀口佐知子は精神人類学、本拠点のモハーチ・ゲルゲイは医療人類学の立場からコメントを加えた後、若手研究者の活発な議論により、自己と他者をつなぐ感性の新たな側面が浮き彫りになった。（モハーチ・ゲルゲイ）

In this workshop, organized and chaired by professor Keizo Miyasaka, we invited two specialists, professor Naoki Nomura from Nagoya City University and Ishu Ishiyama from the University of British Columbia, who presented their ideas on the transcultural aspects of therapeutic encounters in psychiatry focusing on the anthropological dimensions of sensibility in clinical settings. Along with the two keynote presentations, there were two other sessions introducing the work of four young researchers of the anthropology group.

GCOEワークショップ　フィクションの哲学

The Workshop“ The Philosophy of Fiction”

（3月27日　三田キャンパス東館4階セミナー室）

2010年3月27日に、「フィクションの哲学」という標題のワークショップが開催された。本ワークショップは、山形大学の清塚邦彦教授が昨年末に上梓された著作『フィクションの哲学』で示された重要な哲学的考察を、清塚教授御本人をお招きして集中的に討議することを目的としたものである。

清塚教授の著作の狙いは、文学作品だけでなく、映画、絵画、彫刻といった視覚芸術を含む包括的なフィクション概念を、とくにフィクションを受容する者のあり方に定位して解明することである。ワークショップでは、まず清塚教授から、この御自身の試みの背景や補足説明が与えられた。続いて、鈴木生郎（本学文学研究科）及び森宏次氏（東京大学人文社会学研究科）は、清塚教授のフィクション概念の分析が直面する諸問題を、それぞれ異なる立場から明確化することを試みた。こうした対立は、提題者間の活発なやり取りだけでなく、フロアを含めた熱い討論を引き起こすことになった。

また当日は、哲学、美学を含んだ多様な分野から多数の参加者が集まり、フィクションについて各々の立場から積極的な意見交換がなされた。この点で、本ワークショップは、フィクションに関する学際的な意見交流の場としても有意義なものとなった。（鈴木生郎）

The workshop entitled “The Philosophy of Fiction” was held on March 27, 2010. Prof. Kunihiko Kiyozuka from Yamagata University and two graduate students discussed the important issues on the concept of fiction, which were raised in Prof. Kiyozuka’s seminal book, *The Philosophy of Fiction*.

newsletter no-12.indd 6　10.6.22 5:09:28 PM

MRI 特別安全講習
MRI Safety Lecture

2010年4月25日　三田キャンパス第一校舎122教室

2010 年 4 月 25 日、明治国際医療大学医学教育研究センター医療情報学ユニットの教授で日本磁気共鳴学会の理事も務められている梅田雅広教授を講師にお招きし、MRI 特別安全講習が開催された。本 GCOE 拠点で MRI 実験を行う者は、全員、安全講習を受けることが義務づけられており、GCOE が主催したこの安全講習には、26 名の学生や教員が参加した。講習は、MRI の原理と基礎、安全に利用するための注意点に加え、測定に使用されるシークエンスの仕組みなどの応用にまでおよび、MRI 実験の未経験者のみならず、既に MRI の知識や経験を持つ参加者にとっても、学ぶところの多い内容であった。2 時間にわたる講義の後、活発な質疑応答もあり、非常に有意義な講習となった。今回の MRI 特別安全講習をきっかけに、実験関係者全員が、より高い安全意識を持って MRI 実験に臨み、今後も、本拠点で安全に MRI 実験が遂行されることを願う。（四本裕子）

MRI safety seminar was held on April 25th 2010, with a guest lecturer, Professor Masahiro Umeda. Twenty-six attendees learned MRI basics, safety guidelines, and their applications.

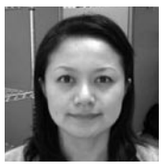
活動報告

タイトル	開催日・会場	主催・共催・企画	企画者	講演者・参加者
Kant's Transcendental Idealism in Focus Part Ⅱ	3月3日・5日 三田キャンパス 東館4階セミナー室 三田キャンパス西校舎 525B 教室	論理・情報班	Wolfang Ertl	Dennis Schulting (University of Amsterdam)
Joseph McCleery 博士 講演会 The neural basis of social and non-social functioning in human development	3月6日 三田キャンパス東館 4F セミナー室	言語と認知班	山本淳一	Joseph McCleery (University of Birmingham)
Development and Education of Logic and Sensibility	3月7・8日 三田キャンパス 北館ホール	全体 （遺伝と発達班）	山本淳一 安藤寿康	長谷川眞理子（総合研究大学院大学）、John Sweller (University of New South Wales)、Alex Thornton (University of Cambridge)、Sidney Strauss (Tel Aviv University)、Joe McCleery (University of Birmingham)、友永雅己（京都大学霊長類研究所）、赤木和重（三重大学）、Gavin Hunt (The University of Auckland)、Hans-Joachim Bischof (Universität Bielefeld)、北澤茂（順天堂大学）、Franck Péron (Université Paris Ouest Nanterre La Défense)、高橋甲介（筑波大学）、玉田圭作（慶應義塾大学）、山本淳一、安藤寿康（遺伝と発達班）、渡辺茂（脳と進化班）、皆川泰代（遺伝と発達班）
Let's talk on infrahuman intelligence	3月9日 三田キャンパス 北館ホール	人間知性 研究センター 当拠点	渡辺茂	Hans-Joachim Bischof (Universität Bielefeld)、Y.Ikeda (Ryukyu University)、R.Masuda (Kyoto University)、Gavin Hunt (The University of Auckland)、Tazu Aoki (RIKEN Brain Science Institute)、Shigeru Watanabe、Yumiko.Yamazaki（脳と進化班）
慶應義塾大学人文 GCOE・山階鳥類研究所合同ワークショップ How can we understand the wild logic?: Lessons from bird brain and behaviour	3月10日 財団法人山階鳥類研究所 セミナー室	財団法人 山階鳥類研究所 当拠点	渡辺茂 伊澤栄一	Hans-Joachim Bischof（ビーレフェルト大学）、Gavin Hunt（オークランド大学）、山崎 剛史（山階鳥類研究所）
Atypical Dopamine Transport Inhibitors: Mechanisms Underlying Their Potential　As Treatments For Cocaine Abuse	3月14日 三田キャンパス研究室棟 会議室 A	脳と進化班	渡辺茂 辻井岳雄	J.L.Katz(DHHS/NIH/NIDA Intramural Research Program、USA)
他者認識・共生にのぞむ感性：文化研究と臨床実践の交差点	3月22日・23日 三田キャンパス東館 4F セミナー室	哲学・文化人類学班	宮坂敬造	石山一舟（University of British Columbia）、堀口佐知子（上智大学・文化人類学）、野村直樹（名古屋市立大学）、照山絢子（University of Michigan）、生田倫子（日本ブリーフセラピー協会）、大沼麻実、皆吉淳平（慶應義塾大学）、宮坂敬造、Mohacsi Gergely(哲学・文化人類学班)
A Proof Theory Workshop(with Lecture Series by Grigori Mints)	3月17・18日 三田キャンパス北館大会 議室	主催：ORC 共催：論理・情報班、 哲学・文化人類学班	飯田隆 秋吉亮太	Grigori Mints (Stanford　University)、Gunnar Wilken（沖縄科学技術研究基盤整備機構）、龍田真 (National Institute of Informatics)、江口直日（神戸大学大学院）、新井敏康（千葉大学）、白旗優（慶應義塾大学）、串田裕彦（論理・情報班）、飯田隆、秋吉亮太（哲学・文化人類学班）
フィクションの哲学	3月27日 三田キャンパス東館 4 階 セミナー室	哲学・文化人類学班	飯田隆	清塚邦彦（山形大学）、森功次（東京大学大学院）、鈴木生郎（慶應義塾大学）、 飯田隆（哲学・文化人類学班）
MRI 特別安全講習会	4月25日 三田キャンパス第一校舎 122 教室	研究成果発信・ 支援プログラム	梅田聡 染谷芳明	梅田雅宏（明治国際医療大学、日本磁気共鳴医学会理事）
Nick Zangwill 教授 講演会 "Logic、Inference and Quasi-realism"	4月27日 三田キャンパス東館 4 階 セミナー室	論理・情報班	納富信留	Nick Zangwill (Durham University)

newsletter no-12.indd　7　　10.6.22　5:09:29 PM

研究員紹介

四本裕子



脳の変化の仕組みをさぐる

2010年４月より、特別研究准教授としてグローバルCOEに参加させていただいています、四本裕子と申します。2005年に米国のブランダイス大学で博士号をとり、その後、ボストン大学とハーバードメディカルスクールにて、リサーチフェローとして、脳の研究に携わってまいりました。私の研究テーマは、「大脳の可塑性」です。神経細胞の集合体である大脳は、日々変化を続けています。繰り返しの訓練は、脳の関連部位のはたらきや構造の増強をもたらします。一方、加齢によって、脳の構造は変化するとともに、はたらきが失われることもありますが、訓練による回復も可能です。また、事故や疾患によって失われた脳機能も、リハビリテーションや時間の経過によって、ある程度回復します。そのような「脳の変化」の仕組みを、行動実験や脳機能イメージングを用いて、解明していきたいと考えています。

寺澤悠理

本塾文学部心理学専攻、大学院社会学研究科心理学専攻を経て、本年度より非常勤研究員としてお世話になることになりました。私は、嬉しい、悲しい、といった感情を経験するために、心と脳そして身体がどのように関わっているのかを、認知心理学や認知神経科学的方法（fMRI）を用いて研究しています。特に、身体の内部状態の変化に関する感覚である内受容感覚が感情を経験する心的･神経的処理において、どのような位置づけになっているのか、というテーマに興味を持っています。このような視点に基づいて、私たちの判断過程に感情が与える影響についても検討しています。健常者のほかに、脳に損傷を持つ方を対象としても、同様のテーマのもと研究を行っています。

鈴木生郎

2009年４月より非常勤研究員として哲学・文化人類学班に参加させて頂くことになりました、鈴木生郎と申します。専門は、哲学、特に現代の形而上学です。現在の研究テーマは、私たち人（person）の時間を通じた同一性に哲学的な解明を与えることです。こうした解明を与えるにあたって、私は17世紀の英国の哲学者ジョン・ロックに由来する「心理説」と呼ばれる立場に注目しています。この立場は、現在の私たちが過去や未来の自分と同一人物であることを、記憶や意図のような心の働きや、自分の将来についての実践的な推論のあり方、すなわち、私たちが備える「論理と感性」のあり方から解明しようとするものです。しかし、心理説は、多くの哲学者によって支持されているにもかかわらず、幾つもの哲学的難題を抱えています。私は、心理説の内実をより明確にすることを通して、こうした哲学的難題に一定の解答を与えることを目指しています。また、こうした試みは、私たち人の備える「論理と感性」の働きの解明に貢献することにもつながるはずだと考えています。

事務局だより

活動予定

■ 脳の講習会～基礎知識～

開催日：2010年 ７月20・21・27・29・30日
　　８月２・４・６日
会　場：三田キャンパス 東館４階セミナー室・他
講　師：小嶋祥三（研究成果発信支援プログラム委員会）

■ 第9回国際プラトン学会　プラトン・シンポジウム　市民公開講座 プラトン哲学の現代的意義～『ポリテイア』（国家篇）を中心に～

開催日：2010年８月７日（土）
会　場：三田キャンパス西校舎ホール
司会（予定）：三嶋輝夫（青山学院大学）、納富信留（論理・情報班）
提題者（予定）：佐々木毅（学習院大学）、岩田靖夫（東北大学名誉教授）、
Luc Brisson (CNRS, France、国際プラトン学会副会長）、
Livio Rossetti (University of Perugia, Italy、国際プラトン学会元会長）

■ 慶應義塾大学・玉川大学・カリフォルニア工科大学共同レクチャーコース（仮題）

開催日：2010年９月８日～10日（水～金）
会　場：三田キャンパス東館 G-SEC Lab・他
レクチャーコーステーマは、neuroeconomics（神経経済学）となります

編集後記　2010年度最初のNews Letterをお届けいたします。
本拠点も折り返し地点を過ぎ、新たなメンバーも加わり新年度が始まりました。今回はシンポジウムやワークショップの報告が中心ですが、心理学、脳科学から哲学、文化人類学、さらには証明論のような数学の一分野まで多岐にわたるアプローチにより学際的･国際的に「論理と感性」を研究する当拠点を象徴するNews Letterになったのではないかと思っております。また、本拠点のこのような特色は、3ページに掲載されました若手研究成果報告会の様子からも十分に伺えるのではないでしょうか。
最後に、大変お忙しい中原稿を書いてくださった執筆者の皆様に厚く感謝申し上げます。

プレスリリース情報

赤ちゃんの脳は４ヶ月で母国語にチューニングされる ――発達脳の適応性、潜在能力を可視化――

慶應義塾大学院社会学研究科の皆川（河合）泰代特別研究准教授は、人文グローバルCOEプログラムとその連携機関であるフランス高等師範学校（ENS）および理化学研究所との共同研究により乳児の脳発達について次の成果を発表しました。日本人の４ヶ月児が母国語、非母国語（英語）、情動音声、サルのコール、合成音を聞いた時の脳反応を近赤外分光法で測定した所、４ヶ月児は母国語に最も強い左半球優位な脳反応を示す一方で、サルのコールにも両半球で広い脳活動がみられました。生後間もない赤ちゃんの脳はどのような環境にも適応できる様々な潜在能力を秘め、発達と共に生まれた環境に脳をチューニングしていきますが、今回の結果は４ヶ月で母国語に適した脳内機構が出来ていることを示します。一方、成人ではサルや動物のコールに弱い脳活動しか得られませんが、４ヶ月児はまだ異種のコミュニケーションコールに反応する脳の柔軟性が残されていることを示唆します。
この成果はCerebral Cortex誌に掲載予定、電子版では５月23日に掲載され、６月３日に慶應義塾よりプレスリリースを行い、朝日新聞、日経産業新聞など各紙で広く報道されました。

慶應義塾大学　論理と感性の先端的教育研究拠点
Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility
Newsletter 2010. June. No. 12

発行日　2010年６月30日
代表者　渡辺 茂
〒108-0073　東京都港区三田3-1-7　三田東宝ビル7F・8F
TEL：03-5427-1156
FAX：03-5427-1209
keiocarls@info.keio.ac.jp
http://www.carls.keio.ac.jp/

newsletter no-12.indd 8　10.6.22 5:09:31 PM